

末法の世に正法の光を

ネパールの世界遺産スワヤンブナートストゥーパ・百年に一度の大修復事業完成

ネパールの目玉のシンボルで有名なスワヤンブーストゥーパは、2008年より10年まで3年の期間をかけて大修復事業が行われました。私は、この事業のコーディネータースタッフとして参加した御縁をもって、レポートをさせていただきます。

世界最古のスワヤンブーストゥーパ

ネパールの伝記によると、「スワヤンブーは、原初仏の時代に聖なる五色の光が奇跡的にストゥーパとして自ら生じた」と記されています。文殊菩薩は、中国の靈山五台山からスワヤンブーの仏塔を拝するためにネパールを訪れ、衆生がスワヤンブーに詣でられるよう、知恵の剣で周囲の山々を切り崩し、湖から水を流しました。カトマンドゥ盆地として現れたこの小高い山の頂に、スワヤンブーの仏塔が出現したのです。

スワヤンブーストゥーパは、過去七仏であるカシャパ仏の仏舎利を祀る重要な巡礼地として、アジア全土の仏教徒達の深い信仰を集めてきました。スワヤンブーストゥーパは、14世紀には現在の規模になったと記録に残っています。15世紀にはイスラム教徒によって破壊されましたが、その後に再建されました。その後、百年毎に修復作業が行われてきました。19世紀初頭と20世紀初頭の過去二回、チベット人篤志家によって修復作業が行われてきた歴史があります。

カトマンドゥ盆地一帯に広がる宮殿・寺院・史跡・スワヤンブーストゥーパやボータナートストゥーパなどの文化遺産は、1979年ユネスコの世界遺産として登録されました。しかし一方で、ネパール文化の伝統建築の多くは老朽化が激しく、また長引く政治的混乱で修復作業もままならず、2003年には危機遺産リストに登録されました。現在、これらの文化遺産は早急な保護の必要性が叫ばれています。

長い内戦から政治的混迷のネパール国内状況

ネパールでは1996年以降、国軍とネパール共産党毛沢東主義派の間で武力紛争が多発していました。2001年、当時のビレンドラ国王が殺害される王宮事件が起こり、その後実弟のギャネンドラ国王が即位しました。しかし国内は政情不安に陥り、マオイストの武装闘争による治安悪化、国王の直接統治、反国王運動の激化と

いう動乱が続きました。2006年、武装闘争を続けてきたマオイストを含む8政党の間で、紛争終結を含む包括和平合意が成立し、王制を廃止し、共和制に移行することを決め、シャハ王朝は歴史に幕を閉じました。

2008年、制憲議会にてマオイスト党首が首相に選出され、6政党よりなる内閣が発足しました。しかしそれ以来、政党間同士の小競り合いが長きに渡り、未だ不安定な政治状態が続いています。混迷を続けるネパールは、経済発展や文化の保護にまで、悪影響が出始めています。

1969年にアメリカに亡命し、北カリフォルニアの地にオディヤン寺院を建設し、西洋に仏教の礎石を築いたチベットの転生ラマ、タルタン・トゥルク・リンポチェとチベタン・ニンマ・メディテーション・センター (TNMC) は、老朽化したスワヤンブーストウーパ修復事業の施主として、ネパール政府考古局と協力しながら、事業開始の準備を進めて来ました。タルタン・リンポチェの長年の請願は、十数年に及ぶネパール国内の政情不安の中で困難を極めました。2008年、正式な修復事業許可を得ることができ「スワヤンブナートストウーパ大修復事業」として、実現に至ることになったのでした。

スワヤンブー曼荼羅の神々

スワヤンブーストウーパは、カトマンズ盆地にある小さな丘の上に位置しています。塔自体は、直径約22.5mのパゴダ型で、四方にはマンダラ寺院建築様式の御堂が九カ所に配置され、伝統的な彫金細工で荘厳されています。パゴダ部の高さは約15mですが、塔部を含む全体の高さは約30mになります。パゴダ部はレンガで形作られ、全体が石灰モルタルで塗られた白いドーム形をしています。

パゴダ上部には、ハーミカと呼ばれる四角い部分に、有名なブツダの智慧の目玉が四方に描かれ、ストウーパのシンボルとして親しまれています。更にその上部は宇宙観を模した十三輪が塔全体の荘厳さを象徴しています。十三輪の上部には、大きな金箔銅製の傘があり、最上部にはガジュと呼ばれる金属のオブジェが置かれています。

ストウーパは、宇宙の秩序をシンボル化した幾何学的パターンを現すマンダラ構造です。マンダラは中心をゼロポイントとし、東南西北の四方に広がる宇宙観を現しています。ストウーパは、マンダラ宇宙観に基づいた自然の力を、調和とバランスを呼び起こす建造物であると理解されています。スワヤンブーの聖地で表されるマンダラのエネルギーは、地球や人類に対して深い覚醒と秩序をもたらし、人類が生み出した否定的エネルギーやアンバランスな状態を修復するに力を持っていると信じられています。

ストウーパの各四方向は、五仏の智慧が対応します。中央部が大日如来、東は阿

閔如来、南は法生如来、西は阿弥陀如来、北は不空成就如来、そして各四方の間には、各如来の明妃が配置されています。パゴダ部には、中央部と八方位を合わせた九の如来と明妃の御堂が祀られています。

ストゥーパの正門はマンダラの入口でもあり、東側に位置します。正門から365段の階段を登りきると、そこには17世紀のネパール王から寄贈された約1.5mの金箔銅製の金剛杵が配置されています。その台座には、銅板に刻まれた円形のダルマダートゥマンダラ（法界語自在マンダラ）が描かれています。ダルマダートゥマンダラは、インド後期密教「マンジュシュリナマサンギティ」の経典に基づいて描かれたマンダラです。スワヤンブー正面の金剛杵とダルマダートゥマンダラは、ストゥーパ自体の小宇宙的相似形であると理解されています。

ストゥーパ塔部は木製ですが、打出し金箔銅板で覆われ装飾されています。塔部は十三の輪が配置され、各輪は十三のマンダラ宇宙観と神々に対応しています。ネパール仏教の伝統では、これらの神々がパタンの近隣都市の様々な仏教寺院に関係し、今も各寺院で捧げされる祈りの中でカトマンドゥ盆地が守られているのです。

過去のスワヤンブーストゥーパ修復の歴史

ストゥーパの構造や仏像は、時間の経過と共に外部の塗料、漆喰、金箔などが劣化摩耗し、定期的な補修が必要とされてきました。ネパール仏教の伝統では参拝時には花や米、水、酒、塗料などを奉納し、これを塗り込める習慣があります。しかし、この様な作法は金箔や銅板にとっては長年の時を経ることで劣化や腐食を招きます。また動物の糞などが付着する事で、ストゥーパ全体の劣化が加速されてきました。

ストゥーパの修復方法は、伝統的に二つの方法があります。第一の方法は、ドーム部の構造体に毎年、石灰を塗り足すことです。第二の方法は、各御堂や全てを覆う金箔銅板を補修することです。

過去の歴史において仏塔の修復は、12世紀から14回の修復事業が行われてきました。主に時のネパール王による修復でしたが、チベット人のスポンサーによって修復が実施されて来た歴史もあります。

16世紀初頭、ミラレパ直系のヨーガ行者として知られるツァンニョン・ヘールカ（1452-1507）が修復事業の篤志家として、その作業を行っています。また遷化後も弟子が師の意思を継ぎその事業を行っています。そして、さらにその孫弟子が意思を継ぎ、1530-1539/40に掛けて事業を成就しています。

第15回目にあたる今世紀の修復事業は、タルタン・トゥルク・リンポチェとTNMCの下で娘ツェリン・パルモ・ゲレックが総監督としてプロジェクトを進めて

きました。

2008年7月吉日、ネワリー仏教の僧侶とチベット仏教のドゥクチェン・リンポチェ、トゥルシツク・リンポチェ、チャタール・リンポチェによって第15回スワヤンブー修復事業開始の法要が営まれました。

釈迦族の末裔、伝統工芸職人集団による修復作業

修復作業は、ネワリー族の中でも釈迦族の末裔と伝えられる伝統工芸美術職人、シャキヤ族たちの協力によって進められました。彼ら自身、この百年に一度の大修復作業に参加出来る事をシャキヤ族の誇りと思っています。作業は、金工、銀工、銅工、木工、石工の職人達70人にチームによって進められました。修復事業に参加する機会は、職人にとって最高の願望であると共に、スワヤンブーの歴史に繋がる貴重な機会に誇りを感じています。彫金職人集団を率いる若きリーダー、サジャン・シャキヤは次のように語っています。

「私は将来、孫と仏塔をお参りする時、ここで働いていたことを誇りに思うでしょう。私の祖父もまた、前回の修復作業に関わった事を聞いていました。そして今、私がこの事業に参加し、指揮させていただいている事に感謝しています。私はネパールの国民であることを誇りに思い、仏教徒の遺産であるネワリー仏教が守り伝えられてゆく事に、貢献出来る事を幸せに思います。」

ネパールの建築・彫刻・工芸など、生きたネワリー仏教文化美術を守り伝えるシャキヤ族は、カトマンドウ、パタン、バクタプルの寺院の建築、チベットやネパールの仏教美術を担う存在として今も活躍しています。現在では、このシャキヤ族の高度な工芸技術は、世界でもトップクラスの技術として評価され、欧米の多くの美術館などで紹介されています。

百年に一度の大修復事業の作業工程

2008年より始まった第一期ストウーパ基底部修復作業は、まずストウーパ基部九方向にある御堂の修復作業から行われました。またストウーパ正面のマンドラと金剛杵の修復も行われました。

修復作業は、ストウーパ全体に張り巡らされている鍍金銅板部を全て手作業で新しく鍍金をし直すものです。これら銅板部の総数は数千点に及びます。長年に渡り風雨にさらされ腐食した銅板を、丁寧に取外し洗浄します。腐食部分は新たに銅板を張り加え、デザイン部分の陰影を叩きだす作業を行います。

鍍金は、金と水銀を石臼で混ぜ込みアマルガムを作ります。これを彫金修復した銅板の表面に塗り、火であぶって水銀を蒸発させます。このような鍍金の技術は、奈良の大仏などで見られる伝統的な鍍金法ですが、蒸発した水銀には毒性がある危険な鍍金技法でもあります。

2009年夏からの第二期ストウーパ上部修復作業は、目玉で有名なハーミカ部、各仏像を配置するトーラン部、そして輪部へと、各部の取外し、修復彫金、鍍金と工程が進められてきました。

ストウーパ上部修復作業の為に、ドーム部には竹や材木で15mにも及ぶ足場が、少しでも加重や付加が掛からないよう工夫され、複雑に組み込まれました。十三ある輪部は下から順に取り外し、各パーツは洗浄、修復、鍍金と進められてゆきます。ストウーパの十三輪は、仏教的宇宙を表し、仏教哲学観のシンボルでもあります。作業中、リング内部構造が複雑な木組みで造られている事が分かり、ストウーパの建築学的理解において貴重な機会であると、考古局学芸員によって調査がされました。また最上傘部には、100年前の事業成就を祝い奉納された「パタ」と呼ばれる黄金のベルトを確認する事ができました。最頂部の「ガジュ」には貴重なオブジェやレリックスが奉納されており、修復作業を通してのみ知り得た貴重な機会でした。

2010年春からは修復した各鍍金銅板を再び貼付ける作業が行われ、仏塔最上部の最終工程へと進みました。ハーミカに目玉部を、如来部菩薩部の各仏像はトーランに、十三輪の鍍金板が各々取り付けられました。そして最後に頭頂部の傘、最頂部のガジュへと作業が進められ、2010年5月、スワヤンブーストウーパ修復作業が3年の月日を経て完成しました。完成までに使用した純金は約20kg以上に及びます。

天から舞い散る華花が祝福するスワヤンブー落慶法要

2010年5月27日、世界最古の仏舎利塔、スワヤンブーストウーパの修復完成落慶法要式が開催されました。この日ネワリ仏暦では、お釈迦様の降誕、成道、涅槃の三大事を祝うブッダジャヤンティの日です。数万人ものネパール仏教徒が修復完成を祝うために訪れ、全イベントが国営テレビで生中継されました。

法要の為に数万個の灯明が、階段や仏塔周囲に配置されました。夕暮れがスワヤンブーに差し掛かる頃19時半。ストウーパの前では、世代の代表として老人と子供の二人が、深い黙祷を捧げ、鐘の音と共に大きなバターランプに火を灯し、落慶式が始まりました。山全体が灯明で照らし出され、修復されたストウーパの金箔の輝きを楽しむように、数万人が仏塔を右繞し続けていました。

6月19日には、第二回スワヤンブー修復完成落慶式が、ネパールのチベット仏教各寺院の代表によって執り行われました。仏塔の周りや各御堂には約二百個の聖水で満たされた器に花が飾られ、何千もの花輪が各所を覆い尽くし、荘厳な美しさを讃えていました。仏塔周囲にあるマニ車は黄色の布で覆われ、仏旗が至る所に掲げられ、バターランプが灯され、香が焚かれ、辺り一面が清らかな香りに包まれました。

法要は、チベット四大宗派全ての二千人以上の僧侶達によってマンジュシュリナマサンギイティなどの経典が心から読誦されました。そして法要の完成としてニンマ派の代表であるHH・トゥルシク・リンポチェによってヘリコプターで右繞し、仏塔とその周辺に空から数千の黄色の花と無数の菩提樹の種子が散華されました。

最後に、伝統的な黄金のベルト「パタ」が仏塔に奉納されました。約10mもあるパタには、マンジュシュリナマサンギイティの経典がランツァ文字で描かれ、観音菩薩やターラが、600もの宝石で蓮の花一枚一枚に装飾されています。この「パタ」には、トゥルシク・リンポチェによって「スワヤンブーストウーパ第15回大修復事業成就の印」が記され、この大事業の施主タルタン・トゥルク・リンポチェの貢献、さらには仏法のさらなる繁栄を祈る祈願文が記されました。

ダルマの光への祈り

長く混迷を続けてきたネパール国内政治情勢の中で、多くの伝統文化財や伝統建築は老朽化し、その価値の保存が危ぶまれてきましたが、スワヤンブーストウーパの大修復事業の成就是、仏教徒にとっての貴重な文化遺産の伝承の証として、近年最も価値あるプロジェクトであると世界中から注目されています。

タルタン・トゥルク・リンポチェとTNMCは、今後も更にインド、ネパール、チベット、スリランカ、東南アジアに広がる多くの仏教文化遺産の保護とそれらの修復を願い、その実現の道を今も模索しています。

「混迷する今日の人類にとって、最も重要な課題は、ダルマの光の伝承を保護し、修復し、維持することです。スワヤンブーとして顕れた知識の光は、惑星や世界各国のバランスを維持し、我々個々人に対して深い癒しの源となります。」

タルタン・トゥルク